

おはぎウエークル

トヨタファームの途上国支援

新見 克也

く氣候が厳しいため、
エサ事情が悪く、豚は
痩せているそうだ。

2018年にミャン
マーの村を訪れた際、
鋤柄さんは2日間で10
時間の養豚セミナーを
開いた。受講した60人
はどれも熱心で、なか
には丸一日歩いて参加
した人もいた。

ミャンマーの養豚で
一番の問題は「種付け」
だという。200軒ほ
どの村に種豚が1頭し
か居らず、近親交配で
仔豚の生存率が低いの
だ。鋤柄さんは村に入
工授精室をつくり、顕
微鏡や精液保管庫を揃
えた。人工授精の手ひ
き書も作って技術を伝
えている。

こうした国際協力で
ミャンマーの村人から
「豚の先生」と敬われ
ている鋤柄さんだが、
その一方で、日本では
豚舎の周辺に移り住ん
できた住民から理不尽
な苦情を言われること
も多い。その違いに苦
笑いもしていた。

2年前の豚熱（豚コ
レラ）感染では飼育し
ていた豚すべてを殺処
分したトヨタファー
ム。苦悩の末に1頭か
ら再開し、現在は7割
程に戻ったそうだ。

その様子を見てきた
ミャンマー人研修生の
ウインさんは、こうス
ピーチしていた。

「日本で学んだ知識と
技術を活かし、ふるさと
と発展のリーダーにな
って欲しいという社長
長の期待に応えられる
よう頑張ります」。

親子二代で40年間
養豚技術を伝える

アジア太平洋地域で
農村開発や人材育成な
ど地道な活動を続けて
いる国際NGO「オイス
カ」が創立60周年を
迎え、中部日本研修セ
ンターのある豊田市で
も7日に記念シンポジ
ウムが開かれた。

私がこのシンポで
特に聴きたかったの
は、親子二代40年にわ
たりオイスカ研修生を
受け入れ養豚技術を伝
えてきたトヨタファー
ム（豊田市堤本町）の
講演だ。先代の鋤柄耕
一さんはフィリピンの
村に豚舎をつくる支援
も行的、現地で名誉市
民になったという。

息子の鋤柄雄一さ
ん（51）は、オイスカ
の方針もあって近年は
ミャンマー中央乾燥地
域から研修生を受け入
れ、現地でも養豚技術
を伝えている。

ミャンマーでは豚1
頭の値段が村人の月収
2カ月分にもなる。貴
重な収入源だが、貧し